

建設業は若者感覚?! : 高校生の卒業後の追跡調査より

吉本, 圭一
日本労働研究機構研究員

<https://hdl.handle.net/2324/18627>

出版情報 : つち. 14 (8), pp.4-8, 1990-08-01. 雇用促進事業団
バージョン :
権利関係 :

建設業は 若者感覚

!?

高校生の卒業後の
追跡調査より

日本労働研究機構研究員

吉本圭一

新しい世界へ

学校の世界から職場の世界へと、いろいろな選択をして、若者たちがさまざまな地域さまざまな職場へと散らばっていく。高校在学中から卒業後までの状況を追いかけて調査していくと、この時期の経験の重みがひしひしと伝わってくる。

本誌昨年八月号でも高校在学中の職業希望について報告したが、以下は、その彼らが現実にとどのようにして進路と職業を選択していたのか、卒業一年目の現状である。対象は、

一九八八年三月に全国二二の高校を卒業した一一五八名であり、報告書は、『日本労働研究機構の『高卒者の進路選択と職業志向』（一九九〇年）である。なお在学中の数値は、『雇用職業総合研究所『高校生の職業希望の形成と変容』一九八九年を参照した。

建設業で おもしろい仕事・ 気さくな仲間に満足

好景気であふれんばかりの建設事業の量と相変わらず確保できない若年者など人材問題とが絡むと、建設業の嫌われる理由探しが始まる。きつい、危険、手が汚れる……など、

あれこれと仕事の中身がとりざたされる。本調査サンプルの中でも建設業へ就職している者は、男子七・六％と決して多くない。だが、若者にとって、建設業の仕事が他の仕事より不満足が高いのかどうか……。ちょっと待ってもらいたい。実際は、逆なのである。

建設業へ就職した若者の「職場への満足」度は図1のように、他業種に比べてとび抜けて高い。男子全体の平均値で今の職場に満足なのは三四％にすぎないのに、建設業では五四％なのである。建設の仕事は「おもしろい」（五八％）し、「同じことの繰り返し」（八％）ではない。他の職場へ入ってみると、半数以上がルーチンワークだったと気づくのと大違いである。

また、職場の人間関係や規律も、ある面で建設業は現代の若者の好みにぴったりのようにみえる。図2のように、建設業では「先輩が仕事のやり方を教えてくれる」（八三％）し、「影響を受ける人がいる」（四六％）。そして、「上下関係が厳しい」（二七％）場合も少ないし、「服装・出勤の管理が厳しい」（二一％）ということも少ない。ただし、あとで触れる問題にもつながるが、「世間的に知られた企業」は少ない。

命令や束縛はいやだが、押し付けがましくなく教えてくれるのは好きといった「若者気

図1 現職の仕事の特徴と満足度 (男子)

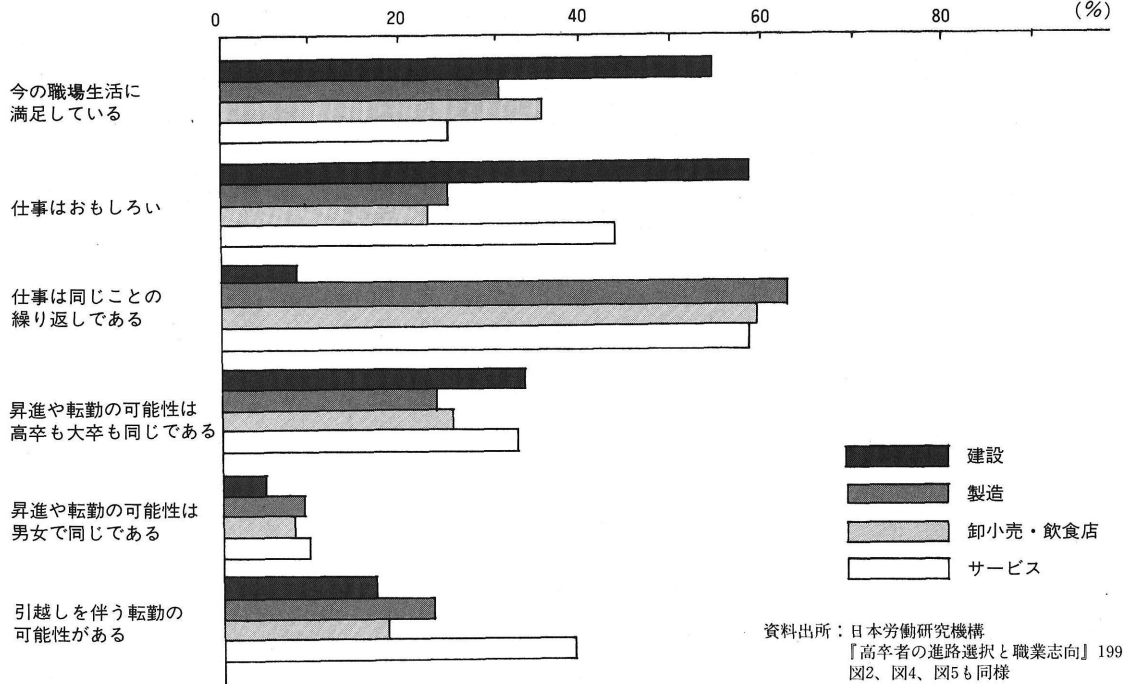
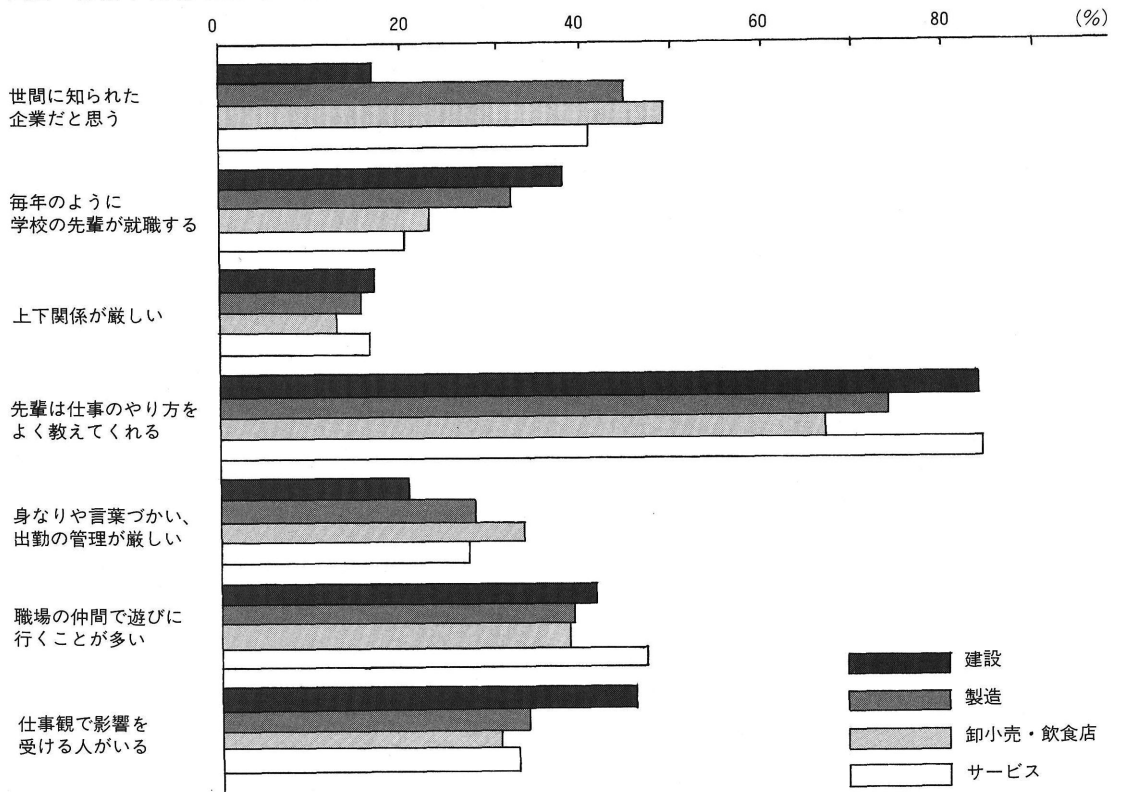


図2 現職の職場環境 (男子)



質」には、最適な職場である。それなら、どうして建設業就職者が少ないのか、高校からの進路選択のしかたに目を転じてみよう。

短期決戦の 職業選択とその基準

ご存じのとおり、高卒の就職活動も求人活動も、短期決戦である。最近の売り市場のもとでは、求人受付や採用選考の開始日から、つまり求人競争のスタートに遅れをとれば、有名企業といえども希望どおりに採用者が確保できるとは限らない。逆に、高卒者の側も悠長に選んでいる余裕はない。人気の高い企業は校内での選考があるし、最初の試験で失敗すれば、残りは選択が限られるといった不安もある。高校の先生に聞くと、こうしたブレッシャーのなかで、求人票が一斉にきて、一週間以内に、ばたばたと生徒の希望が固まるといふ。

そして、この一時期の決断が、そのまま高卒後の初職へとつながっている。初職を決めた時期は、調査の結果をみると六割以上が「求人票を見て校内選考まで」と回答している。校内選考で調整を受けたり、就職試験に何回か挑戦していたりということは少ない。

それではこの時期までに、周到に希望を練っていたかという点、どうもそのようにも思えない。求人票を見る以前からの希望が初職として実現したという者は少ないし、職種希望にしても、将来のキャリア展望にしても、在学中の目的意識は曖昧なままだったのである。

高校三年生の一学期までに希望が決まっていない者もいるし、ましてや一・二年の時期には希望職種が未定の者のほうが多いくらいなのである。

また同様に、長期的な働き方やキャリアの展望についても、図3のように、さまざまの側面で「どちらともいえない」など、志向が定まっていない者が多い。なお、「新人類」といわれたりする割に、大人世代との志向の差が少ないことも記しておきたい。ほとんどは「定職」を志向し、多くが、雇用継続でゆとりをもって仕事をしながら、その道の専門家になることを夢みている。

さて、初職を短期で選択する場合、その基準はどのようなものなのか。図4をみると、男子で最も重要なのは「自分の能力や性格が活かせる」ことであり、「自分の好きなものを扱う企業」「安定して失業の恐れがないこと」なども重要であることが分かる。ここで、建設業へ就職している者の場合をみると、「能力

や性格」、「将来性」を重視する傾向が強く、逆に「有名企業」「収入」「休日・休暇」「拘束時間」は他の産業ほど重視していないという特徴がみられる。

以上のことから次のようなことが言えるのではないかと思う。つまり、選択基準の中には、賃金や休暇といった求人票だけで即断できるものと、「適性」「将来」などに関わる事前に入念な思慮が必要なものがあるが、短期決戦の初職選びは前者の求人票が中心になりがちのところ、建設業を選んだ若者は、より後者の基準を重視しており、初職選びに際し、慎重に考慮して選択してきたようにみえるということだ。

逆に、求人票の字面で競っているかぎり、建設業が他の産業に伍して高卒就職希望者を確保するのは難しいということかもしれない。

建設業への興味と 就職の落差

図5は、建設業への興味の程度別に、初職の選択基準を比べたものである。建設関係七職業（建築設計技師、大工、測量技師、地質学者、建築物解体業者、パワースイッチ運転士、発破係）のうち、三つ以上の仕事をし

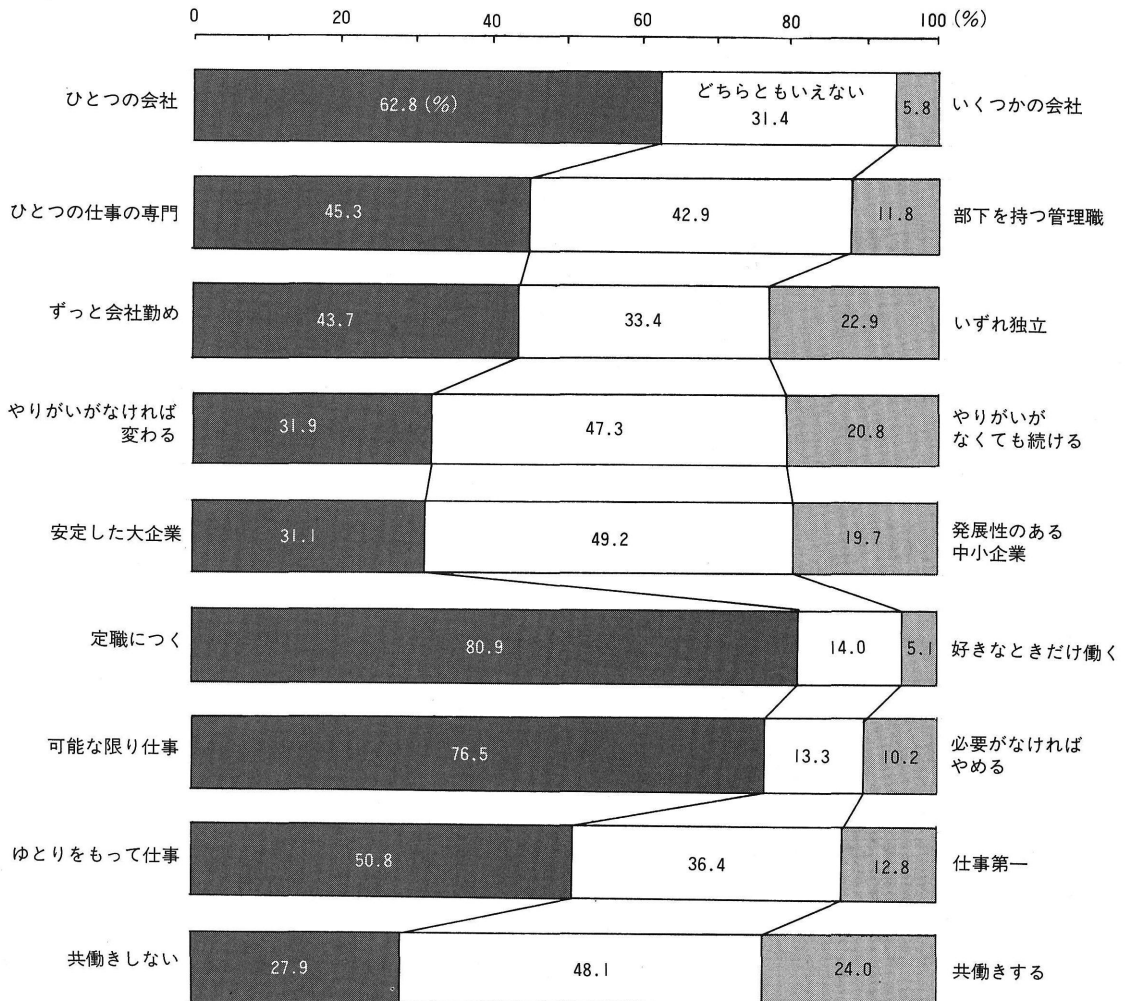
てみたいという一六%に当たる男子(以後、建設業選好グループと呼ぶ)に着目してみると、彼らの中から二割の建設業就職者が出ており、いわば建設業の人材の潜在的なプールとなっている。

この建設業選好グループは、初職の選択にあたって「能力や性格を活かせる」をより重視している。これは、実際の建設業就職者たちと同じ傾向である。

ところが、建設業選好グループと、実際の建設業就職者とは、まるで食い違っている選択基準がある。それは選好グループが「休日・休暇」や「収入」を重視し、実際の就職者はそれらをほとんどを重視していないということである。建設業に興味がありながら他の職場を選ぶ者はこうした面にこだわり続け、建設業への志望を貫く者は、こうした建設業の労働条件の実態を理解したうえで選択しているであろう。

以上のことから、今日の短期決戦での就職のしくみは、それぞれの仕事に関心をもつ人材供給の潜在的なプールから実際の応募者を吸い上げようとする際に、求人票の字面の上の条件が特にクローズアップされて比較されることで、建設業などに対して、多少とも余分のハンデをかけているのではあるまいかと考えた次第である。これからの求人活動に何らかの参考になれば幸いである。

図3 職業キャリアの希望 (男女計)



資料出所：雇用職業総合研究所「高校生の職業希望の形成と変容」1989年。

図4 仕事選択の際に重視したこと（男子）

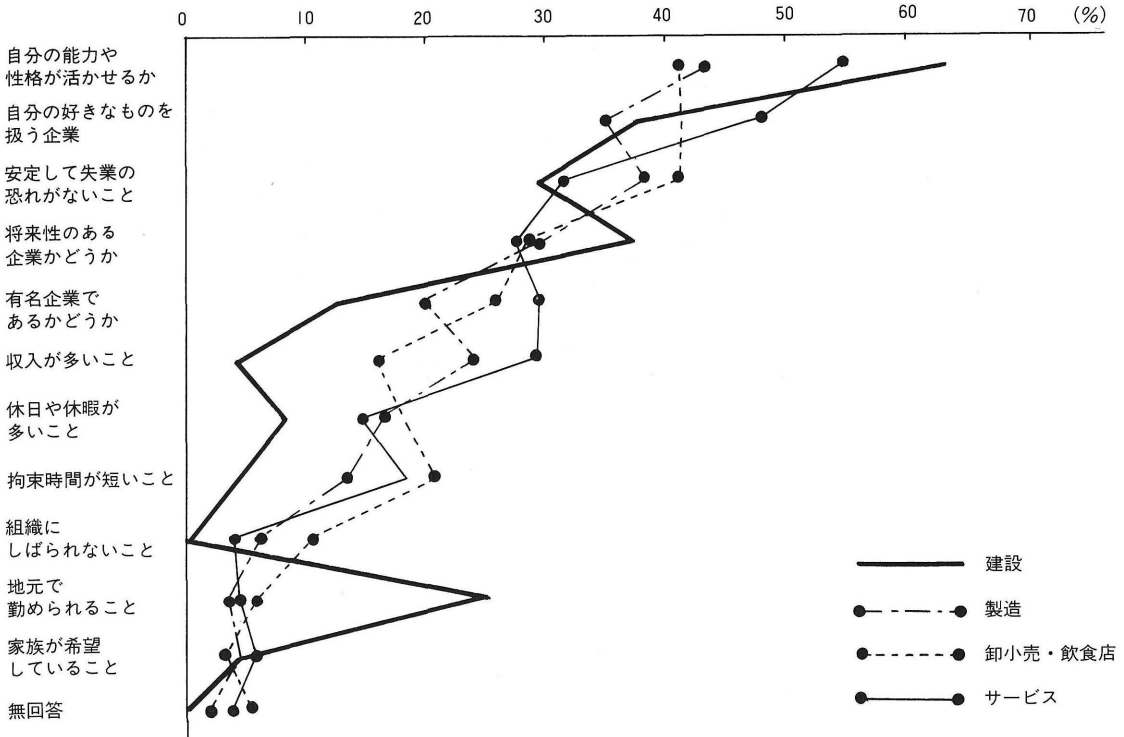


図5 建設選好別—仕事選択の際に重視したこと（男子）

